

特集にあたって

我々の周りにある製品、製品を評価する方法、音環境の指標などは、規格、基準で決められている。

「音響技術」では、NO143(2008年4月)“特集：最新基準・規格の解説”，NO190(2020年5月)“特集：音環境にかかわる法律・基準・規格の動向”などで紹介している。また、様々な特集の内容に関係のある規格基準については、その中で解説されている。

本特集では、JIS、ISO、IECの規格についての特集とした。

日本国内では、JISが主な規格となっている。JISは、5年以内の内容確認や改訂、ISOなどの国際規格との整合性チェックなどが行われている。

ISOについては、JISにはない規格があることも多い。また、ISOは、国際的な枠組みで検討が行われている。したがって、各国にはISOを審議するために国内委員会で設置され、その中で検討が行われている。

本特集では、1章でJISおよびISOの国内の枠組み、2章で音環境に関するこれまでに特集で紹介されていないJISの解説、3章では、JISにはないISO、IECの解説、4章では、ISOの動向と国内委員会の内容とそれらの委員会がかかわっている規格の動向について解説いただいた。

「1-1 JISの制定・改訂について」ではJISに関する法律、JIS案の作成機関、日本規格協会のかかわり、JIS改訂のながれ、原案作成委員会での検討内容等について解説いただいた。「1-2 ISO/TC43(音響)の標準化活動への日本の取り組み」では、音響分野のISOの標準化活動に対する日本の取り組みを紹介いただいた。ISO/TC43の組織構成とTC43、SC1、SC2、SC3の概説、ISO/TC43の標準化作業の流れ、ISOとJISの関係、ISO/TC43の日本の枠組み、2018年に行われたISO/TC43総会について紹介いただいた。

「2.1 JIS A 6321-2023：浮き床ロックウール緩衝材の改定内容」は、2023年に改訂されたJISの改訂の経緯、改訂の主旨、主な改訂のポイントである試験方法と試験機、ロックウール緩衝材の種類区分とその他、改訂された項目と今後の課題について解説いただいた。

「2.2 JIS C 9815-1、-2 エアコンディショナ及び空気熱源ヒートポンプの適格音響パワーレベル」では、いわゆる室外機の音響パワーレベルの測定方法、測定の要点、今後の課題について解説いただいた。「2.3 音圧法による騒音源の音響パワーレベル及び音響エネ

ギーレベルの測定」では、2021年に改訂された、JIS Z 8732音響-音圧法による騒音源の音響パワーレベルの測定方法-無響室及び半無響室における精密測定方法とJIS Z 8734 音響-音圧法による騒音源の音響パワーレベルの測定方法-残響室における精密測定方法について解説いただいた。

「3.1 ASTM E 2611 伝達マトリックス法に基づく多孔質材料の垂直入射透過損失測定のための標準試験方法」では、JISにはない音響管を用いた音響透過損失の測定方法について解説いただいた。「3-2 ISO 9053 流れ抵抗」では、音響材料の吸音性能における重要な物理値である流れ抵抗の規格について解説いただいた。「3-3 ISO 23591：2021 音楽リハーサル室の音響特性の基準」では、音楽の個人練習室やグループレッスン、オーケストラリハーサル室等に用いられる空間を対象とした部屋の基準についての規格について解説いただいた。「3.4 IEC 60268-16Ed5.0：2020(b) 音響システム機器-第16部：音声送信指数による音声了解度の客観的定格」では、音声コミュニケーションにおける音声明瞭度の指標であるSTIについての規格の概要、規格の変遷、STIの算出手順、STIと評価カテゴリーについて解説いただいた。

「4.1 ISO/TC43(音響)の動向」では、TC43本体における最近の標準化活動について紹介いただいた。「4.2 TC43/SC1における最近の企画審議の動向」では、ISO/TC43(音響)の下にあるSC1(騒音)が担当している機器騒音、自動車騒音、環境騒音、聴覚保護、配管騒音、サウンドスケープ、空中超音波のWGの動向について解説いただいた。「4.3 TC43/SC2(建築音響)の動向について」は、SC2において審議されている主な4つのWGとその他のWGの活動の概略を解説いただいた。今回は、都合によりSC3については紹介できなかったため次の機会には紹介したい。

規格は、国内および国際的な重要な決めごとであるので、最新の正確な情報を得ることが重要である。今回紹介できたのは、規格の一部ではあるが、読者の理解の一助となれば幸いである。

(編集担当：岡本健久(文責)、平光厚雄)